

「教養」の概念について

A Note on the Concept "Culture"

圓 増 治 之

Haruyuki Enzo

1. 「教養」とは、単に広い領域にわたって多くの知識を身につけることだけをいうのではなく、読書や実際の体験などを通して獲得した「知識」、さらに「思索」にもとづいて人格的完成をめざして自己形成していく精神的活動全体をいう。しかしこの教養としての自己形成を、個々人が自分のまわりの現実から遊離、ないしは逃避してそれぞれの内面においてのみ追い求めるなら、その場合の自己形成は抽象的にとどまる。ひとはある民族なり、ある時代なりの「文化」との係わりのなかではじめて具体的に自己を教養していくことができるのである。そして、逆にまた個々人の「教養」=形成の努力なくして、いかなる「文化」の形成も期待すべくもない。「教養」を意味する英語の「カルチュア」は同時に「文化」も意味する。まさに、個人の「教養」は社会の「文化」と深いつながりをもって成り立つのである。

しかし、社会の「文化」にディペンドして個人は自己を教養するといえども、個人がある時代、ある社会の文化に無批判に埋没してしまっただけでは自己を教養することはできない。

1952年フランクフルト学派の領袖 M. ホルクハイマーは当時学長を務めていたフランクフルト大学の入学式に際し新生を前に講演を行い、そこで産業社会、大衆社会の時代にあって新しい「教養」のあり方の方向を示した。その一節に次のような件がある。

「自分自身の事に没頭してそれと全体との連関を認識しないなら、そのような者はだれも教養あるものではない。また、大学の職に就いている者はその学問においてスローガンやきまり文句や先入観からの自由を獲得しなければならないが、そのおなじ自由を世間的なことにおいても時代精神に抗して積極的に行使しないなら、そのような者

はだれでも教養のある者ではない。」

自分自身の内面にのみ沈潜して外の世界を顧みないような者は自己を教養しえないし、さりとて、外の流行の文化に埋没してしまった者も自己を教養することはできない。今日私たちに押し寄せる商品や情報は上の講演が行われた1952年など比較にならないほど圧倒的に大量である。これにどのように抗して自分自身を教養していくことができるのか。むつかしい問題である。

2. ドイツ特有の小説形態に、人間の教養=形成の過程を描く「教養小説(ビルドゥングス・roman)」というものがあるが、その範となったゲーテの『ウィルムヘルム・マイスター』の第一部、第二部のそれぞれのタイトルは「徒弟時代(レールヤーレ)」、「遍歴時代(ヴァンデルヤーレ)」というふうに、手工業時代の職人の修行過程に擬ってつけられている。つまり、中世以来ドイツでは徒弟制度のもと職人たちはまず親方について手で、すなわち身体で仕事を習い覚えた上で広く世間に出て仕立て職人、靴職人、錠前職人などとしてひとり遍歴を重ね、一人前のマイスターへと自分自身を形成していったのであるが、この伝統を受け継いで、人格形成は単に書齋のなかの読書や思索だけではなく、実際の身体的「行為」によらなければならないというのが、ゲーテの教養観であった。

同じゲーテの作品『ファウスト』のプロローグの部分でファウストが新約聖書の『ヨハネ伝』のあの有名な「初めにロゴスあり、ロゴスは神とともにあり、ロゴスは神なりき」という言葉の「ロゴス」という語をドイツ語に訳そうという試みる場面がある。まずファウストは、普通よく訳されるように「言葉」と訳してみるが気に入らな

い。次に、「心」、「力」と次々訳語をあててみる
が、いずれも気に入らない。最後に「行為」と訳
してやっと彼は満足できたという。この場面、そ
の後の劇の展開を先取りしている。やがて書齋の
なかだけの研究生活に飽きたらぬファウストはメ
フィストフェレスと魂を賭けた契約をして若返ら
せてもらい、外の広い世界に出て「行為の人」と
なって様々の遍歴を重ねていくことになる。ここ
にもゲーテの人格は「行為」を通じて形成される
という教養観が色濃く現れている。

これに対して日本の教養観念は政治的、経済的、
技術的「行為」を排除する形で形成されてきた。
明治の初めから「和魂洋才」の合言葉のもとヨー
ロッパから洋才、つまり技術的知識のみを摂取す
るのに忙しかった反動から、大正期にはいとヨー
ロッパからの文学、美術、思想など精神的文化
のみに限って理解、摂取しようとする教養主義的
傾向が強くなっていった。そしてその影響のもと、
日本語の「教養」という言葉には外の政治的、経
済的、技術的現実から離れて自分自身のなかで自
己を純粹培養的に形成していくということが含意
されるようになった。その結果、外の世界に「行
為」的に働きかけることより、読書遍歴を通じて
外の世界から知識を受け取ることが「教養」の基
本とみなされたのであった。

3. そもそもゲーテはその自然考察において
“Bildung”という言葉を広く「さまざまな姿をと
って現れてくる」といった程度の意味で用い、こ
の活動を有機体一般について認め、その根本活動
とみなした。

『形態学序説』のなかでゲーテは、「あらゆる形
態、なかでも特に有機体の形態を観察してみると、
そこには、変化しないもの、静止したままのもの、
他とのつながりをもたないものは、ひとつも見出
せず、むしろすべてが運動してやむことがないとい
わざるをえない」（潮出版社『ゲーテ全集』第14
巻p.43）、といている。いかなる生命も、その生
命活動を遂行していくために、そして、たとえば
熱い空気や冷たい水といった外的な自然の要素か
ら自らを守り自己を保持するために、外皮を必要
とする。生命は外皮をとって、つまり一定の形態
のもとに、有機体として現れるのである。しかし、

生命は生命である限り、一定の形態のもとに安ら
うことはない。なぜなら、一定の形態に安らうこ
と、それは死を意味する。いやしくも生きている
限り、そこでは生命なきものと化していく外皮の
内側でたえず新しい外皮が形成され、その有機体
は脱皮し、別の形態へと変態していく。「ひとたび
形成されたものも、たちどころに変形される」。

してみれば、「Bildung(形成)」とは「Umbildung
(変形)」である。生命は一つの形態から他の形態
へ、より高い形態へ、より成熟した形態へと変態
していくことを通して自己を形成していくのであ
る。有機体の根源にある生命の方からいえば、そ
れはさまざまな形態へと変態して一定の有機体と
して現れるのである。そこで、ゲーテは「ある有
機体が現れてくる場合、形成衝動の統一と自由は
メタモルフォーゼの概念なしには把握できないの
である」(『形成衝動』、潮出版社『ゲーテ全集』第
14巻p.14)、と主張する。

この形成衝動が最高度に自由に発揮されるのが、
有機体のなかでもとりわけ人間においてである。
なんとなれば、人間は「重大な場面においては立
法者としてふるまう」。つまり、人間は、自分自身
から自分に対して形式を課して、或るひとつの形
態へと変容し、自分を形成していくからである。
人間はすべての有機体のなかでもすぐれて意志的
に自分自身を形成していくのである。この意味で
の人間の Bildung(人間形成=教養)をゲーテは
ある一個の人間ウィルヘルム・マイスターを通し
て描いた。それが『ウィルヘルム・マイスターの
徒弟時代』、『ウィルヘルム・マイスターの遍歴時
代』の二部作の小説である。

4. ゲーテの『ウィルヘルム・マイスター』二
部作のプロットはおおよそ次のようなものである。

町の良家に育った主人公ウィルヘルムは子供の
頃より演劇に興味を抱いていたが、青年期を迎え
ると退屈な市民生活を嫌い、家を出て演劇の世界
へ飛び込んでいった。そこでさまざまな人や事件
に出会い人生経験を積んでいく。やがて、かつて
の恋人の忘れ形見フェーリックスを自分の子と確
認したところで「修行時代」は終わりを告げる。
フリーメーソンを思わせる「結社」の一員となっ
たウィルヘルムは、「三日以上一つ屋根に逗留して

はならない。少なくとも宿から一マイル以上へだたっていないければ、新しい宿をとってはならない」といったその風変りな掟にしたがって、一子フェーリックスを連れて各地を転々とする。「遍歴時代」の始まりである。

まず彼は、とある山中で聖書の聖家族になぞらえたような大工ヨセフの家族に会い、その家に泊めてもらって交流する。さらにウィルヘルムはかつての劇団時代の知り合いで今はモンターンと名乗り鉱山の仕事をしているヤルノーに会い旧交をあたためる。その折リウィルヘルムは、外科医術を修得したため一つ所に滞在できるようあの掟から解放してもらいたいのので、そう結社の同志にとりなしてくれるようヤルノーに依頼し、彼と別れる。その後も掟にしたがって転々と遍歴を重ねたウィルヘルムは、フェーリックスをある大きな学園に預けさらにひとり旅をつづけるが、やがて願いがかない、掟から解放される日が訪れる。外科医術の修得にいそしみ卓越した外科医となったウィルヘルムは、新しい社会をつくるべく結社の同志と新世界アメリカへ渡ろうとするとところで、この物語は終わる。

『修行時代』の主人公の人間形成は、演劇および劇団生活を媒介としてなされていくが、『遍歴時代』では「手仕事」を媒介として主人公が自己を豊かに形成していくさまが展開されていく。『遍歴時代』は「諦念の人々」という副題をもつ。人間社会に真に有用なものとなるためには、一つの手仕事に自己を制限し、それに打込まなければならない。『遍歴時代』に登場する大工ヨセフも鉱山師モンターンも諦念の手工業者である。そして、「僕のせがれには、一つの限られた手仕事があたえられるよりも、もっと広く世界を見る目をあたえてやりたいですね」といって一子フェーリックスを連れて遍歴を重ねたウィルヘルムもやがて、「あらゆる生活、あらゆる行為、あらゆる技術には、まず手仕事が行先しなければなりません、この手仕事は、ただ制限することによって修得されるものなのです。およそ一つのことを正しく知り、かつ実行することは、百のことを中途はんばにやるよりもっと高い教養をあたえてくれます」という一人の老人の意見に従い、フェーリックスを「学園」に預けることになる。ここに著者ゲーテ

の教養観が端的に表れている。「手仕事」によってこそ高い意味での「教養」が身につくというのである。そして子供と別れたウィルヘルムも外科医術の修得に専心し、一人前の医者となる。医者になかでも外科医はとくに手工業的である。中世ヨーロッパでは理髪師が外科医を兼ねていくらいである。手仕事を媒介とする人間の自己形成を描くゲーテは、さらに熟達した手工業者の共同による社会形成を夢みたのである。

5. ルネッサンスは、中世には卑しめられていた「肉体」が古代ギリシア時代と同じように再び賛歌されるようになった時代であるといわれている。中世の美術の代表的モチーフである十字架上のキリストの肉体のみすぼらしさといったらどうだろう。それはもうほとんど骨と皮だけである。これに対して、たとえばルネッサンス時代の男性美の象徴といわれるミケランジェロの『ダヴィデ』は筋肉隆々で、それはクラシック期のギリシア彫刻の復活を思わせるであろう。

しかし、そこにはギリシア彫刻とは異なる何かがある。コントラポストの完璧な具象化として名高い古代ギリシアのポリュクレイトスの『ドリュフォロス』と比較頂きたい。なによりもミケランジェロの『ダヴィデ』像は頭の大きいことが目につくであろう。これについてはこの像が均衡に欠けるとの批判がある。しかしその一方で、この像はもともとフィレンツェ共和国の市政庁正面入口前の広場に高い台座の上に立っており、人々は下から仰ぎみることになるのであるが、その場合、頭がこれくらい大きいほうが遠近法的にバランスよくみえるのである、という指摘もある。しかしそれにしても遠近法的にいったえて大きくする必要がない両方の手も大き過ぎる。それにその手は血管が浮き出ているところまで詳細に刻まれている。「手」が強調されているところ、そこにこそ古代ギリシアの「トルソ」的な彫刻との大きな違いがあるだろう。

このミケランジェロの『ダヴィデ』像にみられる手の強調こそ近代的な人間観における人間形成＝教養において果たす「手」の、そして「手仕事」の役割を象徴しているのではないだろうか。

6. ルネッサンス以来、ゲーテの時代にいたるまで「手仕事」に基づいて近世の「文化観」、「教養観」は形成されていったが、機械生産の労働管理社会の今日では当然手仕事時代の「文化・教養観」とは異なるであろう。

鍛冶屋、錠前屋、鍍工、時計職など中世ヨーロッパの手工業時代の職人は、自分の手で道具をしっかり握り、それを駆使し、自分の技術や工夫をすなわち自分の「人格」を傾け、なにか作品を最後まで仕上げた。彼らはずねに自分の手のなかからある一定の作品が産み落ちるのを、大きさにいえば、ある一定の価値が創造されるのを見ることができたし、それゆえまた自分の仕事の意義を確かな手触りでもって把握することもできたのであった。

しかるに、分業の細分化、部品・製品および作業の規格化・標準化による大量生産の時代の到来を迎えた現代、どれだけの方が自分の人格を傾けて仕事をしているであろうか。規格化され標準化された作業ならこの「私」でなくても、ほかの「誰か」がやっても同じであろう。そのような、もはや仕事ともいえぬ「作業」に誰が自分の人格を注ぎこむであろうか。人格を傾けてする仕事にしてはじめてひとは人格を形成していくことが、自己を教養することができるのに。19世紀の終わり分業の時代を迎え、ニーチェはその著『エッケ・ホモ』のなかで自著の『反時代的考察』について振り返って語っている箇所ですでに次のように述べている。

「・・・この非人間的な歯車と機械的からくり、労働者の『非人格性』、『分業』という誤った経済のために、生は病んでいる。目的、すなわち文化は失われて行き、――手段、すなわち近代的科学という営みは野蛮化する・・・。」

(Kritische Studienausgabe Bd.6 S.316)。

ここでニーチェは「文化」が目的であるといっている。文中の「文化」という語は、原文では“Cultur”で、「教養」とも訳しうる。すなわちニーチェに従えば「生」の目的は生自身の自己形成ということになる。ところが目的と手段が転倒しているというのである。そして『反時代的考察』ではニーチェは「装飾文化」つまり単なる装飾と化した「文化」、そして「教養」に痛罵を浴びせかけ

たのであった。

ニーチェの時代に比べて、比べようもないくらい分業が進んだ今日ではましてや仕事を通じて人格を形成していくということなど期待しうべくもないであろう。そして「教養」はいまや単なる「装飾」に、いや「虚飾」に化そうとしている。

7. ニーチェは『エッケ・ホモ』のなかで誇らしげに、「教養俗物 (Bildungsphilister) という語は私の著作以来、国語に残るようになった」(Kritische Studienausgabe Bd.6 S.317)といっている。ここで彼のいう「私の著作」とは『反時代的考察』のことをさす。この著作全篇が痛烈な文化批判、時代批判となっているのであるが、とくにニーチェはその第一篇『ダーヴィド・シュトラウス、告白者と著述家』では、普仏戦争での軍事的勝利をドイツ文化のフランス文化に対する勝利と取り違え、いい気になって自己満足的な気楽さに安んずる当時のドイツ文化を似而非文化として容赦なく批判している。そして、このような時代風潮に迎合する知識人を指してニーチェは当時の学生用語を使って「教養俗物」と呼んだのであった。以後それまで俗語として使われていた“Bildungsphilister”という語は、ドイツ語の辞書に採り上げられるようになったといわれている。

では、「教養俗物」の「俗物文化」(Philistertum)から区別されるべき「真の文化」とはニーチェにとって一体如何なるものであろうか。

ニーチェは『反時代的考察』の第一篇の冒頭、普仏戦争でのドイツの勝因はドイツの教養と文化ではなく、ドイツの将校のより博い知識、ドイツの兵隊のより高い教育、そしてより科学的な戦略にある、と議論した後、「文化とはなによりもまず、或るひとつの民族のすべての生活表現における芸術の様式の統一である」(Kritische Studienausgabe Bd.1 S.163)と、有名な定義付けを行っている。さらにつづけて曰く、「しかし博識博学は、文化の必須の手段でもなければ文化の徴表でもなく、場合によっては、それは文化の反対物たる野蛮、すなわち無様式性あるいはあらゆる様式のカオスの混乱に非常によくマッチするのである」と。上の「文化」についての定義は「民族」という語を「人格」という語に置き換えればそのまま「教

養」についてもあてはまるであろう。「教養」とは知識の量とは無関係である。いやそれどころかニーチェからすれば統一なき多量の知識の氾濫はむしろかえって「野蛮」でしかないのである。その意味では過剰な情報の溢れる今日の情報化社会の状況こそまさに「野蛮」ではないだろうか。みんなが気楽に同じようなことを全員斉唱的に語るような人間の「画一化」、それは「様式化された野蛮」でしかない。これに対し「文化」、「教養」とは、一個の民族なり人格なりが、絶えざる厳しい自己追求、自己陶冶をつうじて常に自己を根源的に創造していった安らうことのない独創的活動なのである。

8. 「一般教育」の授業は大学教育の目的の一つ、「幅広く深い教養、総合的判断力を身につけ、豊かな人間性を涵養する」という教育目的、つまり「教養形成」という目的を担っているが、その大部分の（少なくとも、学生が卒業するのに必要とする単位数の大部分を供給している）授業は「講義形式」、それも「マスプロ授業」で行われている。大学の「講義形式」の授業について、パーゼル大学教授の若きニーチェは『われわれの教養施設の将来について』と題する公開講義のなかで次のように語っているが、これは現在の「一般教育科目」の授業についてもあてはまっていることではないだろうか。すなわち、

「学生は、聴講する。彼が語る時、見る時、歩む時、人と交わる時、芸術を行う時、要するに彼が生活する時、彼は自立的、つまり教養施設から独立的なのである。学生は聴講する一方、同時に学生は非常にしばしばノートをとる。これは、学生が大学の臍の緒に依存している瞬間である。彼は聞きたいと思うものを選択できるし、聞いたことを信じる必要もないし、聞きたくないときは耳を塞ぐこともできる。これが『講義形式』の教授法である。

ところで教師はこのように聴講する学生に語る。教師が普通考えたり行ったりすることはものすごい裂け目によって学生が知覚する事柄と断絶している。教授は語る一方、同時にしばしばノートを読み上げる。一般的には教授はこのような聴講者のできるかぎり多く持とうとする。

仕方がない場合は少数の者で我慢することもあるが、ひとりの聴講者で我慢することはほとんどない。ひとつの講義する口と非常に多くの耳とその半数の筆記する手——これが外見上の大学の装置であり、これが大学という作動中の教養マシンである。ところで、この口の持ち主は多くの耳の所有者たちと切り離されており独立している。そして、この二重の自立性を人は高揚した気分でもって『大学の自由』と称える」（*Kritische Studienausgabe Bd.1 S.739 f.*）。

しかし、ここで称えられる「大学の自由」の「自由」とは、教授が講義内容を自由に決め、一方学生は聴講する講義を自由に選択するといった意味での「自由」でしかない。自分自身によって自分を導いていく「自由精神」のそれではない。もし学生が単に受容し学ぶだけで、狭い専門領域に甘んじ、自らを絶えずより高めていく教養力を身につけず、専門以外は無教養なままで卒業してしまうなら、そのような人間は規格に従って仕立てあげられた「ねじ」に似ている。ニーチェは『われわれの教養施設の将来について』の草案の一つとして遺された断章の一つに、「今日、学問の分業と専門学校は教養の偏狭化へと導いている。とにかく教養は今日までより一層お粗末なものになっただけである。仕立て上がった人間、それはまったく異常である。工場が支配している。人間はねじになる」（*Kritische Studienausgabe Bd.7 S.298*）、と記している。さらに敷衍していえば、今日の大学の教師たちは工場労働者のように「ねじ」のような人間を大学という「教養」マシンによってマスプロ的につぎつぎ仕立てあげ、社会に供給している、ともいえるだろう。

では、真の「教養」を育む地盤となるものとしてニーチェは何を考えていたであろうか。『われわれの教養施設の将来について』でかれは「哲学」、「芸術」、「古典教育」の三つを挙げている。「一切の教養は、今日大学の自由ともてはやされているすべてのものの反対から、すなわち服従、従属、訓練、奉仕から始まる」（*Kritische Studienausgabe Bd.1 S.750*）というニーチェからすれば、古典教育における厳格な言語訓練や厳しい芸術的訓育がたいせつとされるのは当然といえば当然であろう。しかし、「哲学」は何故だろう。

ニーチェは云う。「人間は諸々の極めて深刻且つ困難な問題に取り囲まれているので、もし正しい仕方ですれら諸問題に関心を向けるようにされたなら、人間は時を得て持続的なあの哲学的驚きに陥るだろう。そしてこの哲学的驚きの上のみ、それを稔り豊かな地盤として、より深くしてより高貴な教養が生育することができるのである」(ibid. S.741)。古くアリストテレスも、哲学は「驚き」(タウマゼイン)から始まる、と云っている。ニーチェも云うがごとく人間は、諸々の極めて深刻且つ困難な問題に囲まれて生きている。しかし普通ひとは日常茶飯のことに煩わされそのことに気づかない。日常性のヴェールが破れ問題が問題として現れたとき、そこに「驚き」が生まれ、その「驚き」からまことの「知」を問い求める活動としての「哲学」が生まれるのである。そして、ニーチェはそこに「より深くしてより高貴な教養」が生育できる、と言う。まさに、ニーチェにとって「哲学」こそが「教養」そのものに他ならないのである。しかし、その哲学そのものが大学から追放されているとニーチェは嘆く。いや、ニーチェの時代以上に、今日「哲学そのもの」は大学から追放されている。たとえ、「哲学」という科目は設けられているとしてもである。

9. 狭い専門領域に偏さない普遍的な能力、態度、識見の陶冶を目指す「一般教育」の理念は、古代ギリシア以来のヨーロッパの「リベラル・アーツ」の伝統を受け継ぐものである。「リベラル・アーツ」とは自由民たる限りまず修めなければならない教養科目を云う。この理念は、専門分業の細分化が進んだ今日、専門的偏狭さから解放され広い視野に立って自由に思考できる人間を育てるという新たなる意味において、重要なものとなってきている。

さて、「リベラル・アーツ」の科目が確定したのは、古代ローマ末期から中世初めにかけてであるが、そこでは、科目は文法学、修辞学、弁証法の基礎三科(trivium)と、算術、幾何学、天文学、音楽の応用四科(quadrivium)からなり、自由七科(septem artes liberales)とよばれた。基礎三科に挙げられた科目はいずれも「ことば」とそれによる「表現」、「思考」とにかかわる科目であっ

た。つまり、「ことば」についての教育が重要視されていたのである。

この言語教育重視の伝統は古典的教養教育を旨とする近世ドイツのギムナジウムの厳格なギリシア語教育やラテン語教育にも脈打っていた。しかし、若い頃ザクセンの名門ギムナジウムのプフォルタ学院でギリシア語・ラテン語を中心とする典型的な古典教育を徹底的にたたき込まれたニーチェは、すでにギムナジウムの語学教育が変質したと嘆いている。当時のギムナジウムの語学の教師たちは、方言や語源や判読の研究に埋もれてしまい、「彼らのうちのだれも我々老人のように、自分の愉しみのために、自分のプラトン、自分のタキトウスを読むことができないのである」、とニーチェは述べている(Kritische Studienausgabe Bd.1 s.705)。ギリシア語やラテン語を比較言語研究や語源研究といったしかたで客観的に研究するのではなく、もっと主体的に古典と「自分のプラトン」、「自分のタキトウス」として取り組むことによって、ギリシア精神、ラテン精神を範型とし自らの精神を形成していくことができる。それこそが真の教養というものである。ところで、或る一つの言語は、或る一つの時代、或る一つの民族、或る一つの精神の産物であり、思想の蓄積であるかぎり、語学は単に知識獲得のための一つの手段というよりもむしろ、語学自体がすでに一つの重要な教養なのである。外国語を学ぶことがすでに別の精神を学び摂取し、自らの精神を形成していくことになるのである。

ところが、テクノロジーの時代のテクノロジー関係の用語はきわめて画一的に普遍的である。機械についているマニュアルは簡単に他の言語に翻訳可能である。つまりその言語には精神がないのである。語学教育が単に機械のマニュアルに書かれているような言葉を理解するための教育に墮したとき、それはもはや「教養」教育とはいえないであろう。

10. 語学教育のなかでもとりわけ教養教育として重要なのは母国語についての「読み・書き」の訓練であろう。事実、ニーチェもまた母国語を「真の教養が始まる第一にして最も身近な対象」(Kritische Studienausgabe Bd.1 S.683)とよんで

いる。ところが、この母国語が、ニーチェが嘆いているように、いやそれ以上に、今日の日本の教育のなかでなおざりにされている。そして、その一方で新聞、週刊誌、テレビに溢れる俗語、業界用語、省略語、きまり文句、誇張的な表現が今日話すことや書くことを支配し、誰もがきわめて劣悪、卑俗な仕方でも語ったり、書いたりしている。とくに、現代の若者の会話には「テレビ」と「漫画」の影響は大きい。彼らにとって「ことば」は写真や漫画、映像などの添えものに成り下がってしまい、論理的というよりも挑発的、感情喚起的なものになっている。

かつて「言霊の幸ふ国」と謳われた日本では、ことば自身が魂をもつと考えられた。また、念仏として唱えられた「言葉」は、言葉とは別のなにかを指示する単なる「記号」ではなく、それ自身がすでに「仏」であると考えられたりもした。しかし、今日「言葉」からその呪術的力が剥奪され、単なる「道具」と見られるようになる。そうなれば、道具としての言葉に求められるのは、使用上の有効性ということになる。その限りでは、ウィトゲンシュタインのいうように、「ことばの意味について語るな、使用について語れ」ということになるのかもしれない。しかし、それは人間の道具化を一層おしすすめるに過ぎない。

道具としての言語は、それが情報伝達のために使われる場合にはその効率的使用のために、画一的な一義性において使用されることになる。この場合その言語の意味するところは、一義的明瞭さを有するが、含蓄的な深みのない浅薄なものとなる。このような言語を媒介として画一的な情報は効率的に伝達できるかもしれないが、しかし何らの抵抗もなくスムーズに情報伝達が行われることによってそこには「問答」が、すなわち弁証法的思惟が起こってこない。かくして、言語の情報伝達道具化のなかで人間の思考能力は麻痺する一方、コマーシャルなどの誇張的な表現の言語は思考の麻痺した人間の感情、欲望を効率よく挑発し、操り動かす。巧みに操作されたマス・コミュニケーションの大衆向けの言葉は、思考能力、批判能力を喪失した大衆にとって、近世剥奪された呪術的力をふたたびもつのである。

マス・コミュニケーションの呪術にかかって魂

を奪われて流行語に流されないためにも、いままに求められるのは、自分の魂を、そして人格を傾けて語り、そして書く能力であり、そのための言語上の訓練である。

11. 古くプラトンが『国家』のなかで魂の教養のためにムウシケー（音楽・文芸）とともにギュムナスティケー（体育）も必要だとしたように、教養形成の方法は書齋のなかで座しての「読書」だけに限らないことは確かではあるが、「読書」が教養のためのもっとも有力な方法であることもまた確かである。ある人の「読書遍歴」こそ、その人の教養形成の道程を端的に示すものである。

時として、この「読書遍歴」の途上で、「魂の転向」を引き起こすような邂逅というべき出会いもある。例えば、ニーチェのショーペンハウアーとの出会いがそうである。大学時代のニーチェは生活が荒れ、ボン大学からライプツィヒ大学へ移ったときには、体調も思わしくなく、無気力な状態にあった。このような時に彼はショーペンハウアーの名著『意志と表象としての世界』に出会ったのであった。その模様をニーチェ自身次のように記している。

「ところで、かかる状態でショーペンハウアーの名著を読むことが、どのような影響を与えるか想像してほしい。すなわち、ある日私はローン老人の古書店にてこの本を見つけ、私が全く知らなかったこの本を手にとり、ぱらぱらと頁をめくった。いかなるデーモンかは知らないが、『この本を家に持ち帰れ』と私にささやきかけた。とにかく性急には本を購入しない私の普段の習慣に反して、そのようにした。家に帰ると手に入れたこの宝物を手にとりソファの隅に身を投げかけ、このエネルギーで陰鬱な天才が私に力をおよぼすがままに身をまかせ始めた。」

（シュレヒタ版全集第3巻133頁）

この後2週間、ニーチェは憑れたかのようにこの本をむさぼり読み、無理やりにでも自分自身を夜中の2時にベッドに追いやり、朝は6時にベッドをはなれなければならないほどだったという。「本と娼婦は、ベッドに連れ込むことができる」とベンヤミンは言ったが、ニーチェにとってショーペンハウアーの本はベッドに持ち込んで寝る前にち

よっと気軽に読むといった代物ではなかったのである。このようなショーペンハウアーの本の耽読のなかからやがてニーチェは彼独自の思想を懐胎するのであった。

ところで、大量の書籍が刊行され溢れかえる情報化時代の現代、このように本との衝撃的なまでに創造的な邂逅がなおありえようか。大量生産大量販売の時代にあって本も消耗品として流通する。大量に売れなければならない。人の目を引くようにどぎつい装丁を施し、野菜・果物なみに店頭に山積みされて売られる。それらの本は流行廃れが激しく、少し経って売れ残れば生鮮食料品の野菜果物なみに廃棄処分とするしか仕方がないだろう。このような現代にあって、読書による教養はなお望むべくもあろうか。

12. 1990年製作のドイツ映画に『ゴー・トラビー・ゴー』という映画がある。「トラビー」とは、旧東ドイツで製造された大衆車「トラバント」の愛称。かつて子供が生まれたときに申し込んで、その子が結婚する頃になってやっと順番がきて手にはいるといわれるほどの人気車であった。しかし、この人気はトラバントの性能の優秀さを表すものではなく、社会主義国家の計画経済の硬直性を表しているに過ぎなかった。「技術の化石」といわれるほど技術革新から取り残され、ドイツ統合近くまでツーサイクルエンジンを乗せ、ポッポッと青白い排気ガスを吐きながら東ドイツを走りまわっていた車である。こんな旧式の車ですら旧東ドイツではなかなか手に入らなかったのであった。

さて、映画のストーリーであるが、東ドイツザクセンの国語教師ウドが妻と年頃のひとり娘を連れてゲーテの『イタリア紀行』(1816~29)を片手に愛車トラビーを運転し、アルプスを越えてイタリアのナポリまで旅行するという話である。そのトラビーたるや、その年頃の娘が生まれたときから乗っているという代物。途中さんざ人からかわれ、故障したり事故を起こしたりしながらなんとかナポリに到着。その時にはすでに車体はぼろぼろ、ポンコツ車同然になっていた。それでも主人公一家はいかにもとおしげにトラビーの車体を丁寧に磨いてやって、再びそれに乗って帰路につくのであった。そこには西ドイツに経済的に大

きく水をあけられプライドが傷つけられ、くじけそうになりながら、どっこいそうは行かないといった東ドイツ市民のしたたかな姿があった。

もうひとつ、主人公ウドにみられるのはドイツ人の旅行好きといった姿である。それも、「教養旅行(Bildungsreise)」という言葉があるくらい歴史探訪、芸術探訪、文学探訪の旅行が好きである。わが主人公ウドもゲーテの『イタリア紀行』に描かれた場所をつぎつぎと訪れてはその一節を口ずさんでいる。その姿にディレッタントな俗物根性を見ようとすれば見て取れるであろう。しかしその旅行は、「美術史家といくヨーロッパ一週間の旅」といった類の講師までバックされた最近流行りのパッケージツアーに比べれば、商品化されていない旅であり、はるかに冒険に富んだものである。その点その旅は、単に知識を受動的に受け取っただけで終わりはしなかった。ウドの妻の妊娠は、旅行から帰ってからの彼の一家の新たな生活の胎動を予感させる。このように、新たな生活を形成する旅行、それこそ真に“Bildungsreise”というにふさわしいであろう。

13. 現代社会において新聞、写真週刊誌、テレビ等のマスメディアは、大量の情報を世界各地からリアルタイムで伝達し、私たちの身の回りには大量の情報が溢れかえっている。しかし、大量の情報を手軽に手にいれることができることによって一体私たちは教養を深めることができるようになったであろうか。いや、否といわざるを得ないだろう。

現代社会は民主シーならぬメディアクラシーの社会ともいわれている。巨大化したマスメディアは人々に強大な影響力をふるい、社会を動かし、支配している。そのような状況下、今日マスメディアを通じて日々人々のもとに一方的に押し寄せるジャーナリスティックな情報は余りにも大量であり、人々はそれを人格形成のための糧として受け止める暇もない。豊かな人格を形成するどころか逆に、人々はジャーナルな仕事とジャーナリスティックな情報とに追われて人格をすり減らしながらその日その日を過ごすことになる。人々の関心は自分の人格を高めること、つまり教養の形成へと向かうことなく、マスメディアが提供して

くれる些末な事柄についての情報に向かう。かつてなら、サロンでひそひそ囁かれたスキャンダルもいまや公然と公器たる電波を介して地球をかけめぐり、世間の人々の耳目を強引に引くことになる。

たとえば、英国王室のスキャンダルに人々はマスコミ報道によって否が応でも興味を引き寄せられることになる。英皇太子妃の結婚生活の内幕を暴露した『ダイアナ妃の真実』という本は発売以来半年もたたないうちに英語以外の22カ国語に翻訳され、全世界で300万部が売られ、著者のもとには日本円にして6億円以上が転がり込んだという。いまや英王室スキャンダル報道は1兆円産業。これに群がる報道陣もあさましければ、彼らによって伝えられた情報をむさぼり読む人々もあさましく、自ら心を貧しくしている。

かつて一切の財産を捨て、キリストの愛と清貧

のうちに生きた「フランチェスコ派」のモットーに、「何もたぬものこそ、すべてを手に入れるものなり」(nihil habentes, omnia possidentes)という言葉があるが、過剰な情報の氾濫の中で知りたいと思う(あるいは、その実それについて知りたいと思うように仕向けられた)情報のすべてが手軽に手にはいる今日の人々については、この言葉を裏返して、「すべてをもつものは、何も手にいれぬものなり」(omnia habentes, nihil possidentes)といえるのではないだろうか。

(追記) この研究ノートは、平成5年度長野大学特殊研究助成金の交付を受けた研究の成果の一部である。ゆくゆくは本格的な論文に纏めあげていきたいと考えている。

(えんぞう はるゆき 教授)

(1994.3.31 受理)